

リチャード1世の野心的王位継承

An Ambitious Coronation of Richard

川 瀬 進

分野：経済史

キーワード：封建制、相続、バロニアル=レヴォルト、サラディン=タイス、王位継承

I はじめに

ヘンリー2世 (Henry , Curtmantle, 1133.3.5-1189.7.6 : 在位 1154-1189) と
アリエノール=ダキテーヌ(Alienor d Aquitaine : Eleanor of Aquitaine, 1122-1204)
との間に、第4子、3男として、オックスフォード、ポウモント=パレス
(Beaumont Palace)で、1157年9月8日、リチャード(Richard, 1157.9.8-1199.4.6)
が生まれた。

リチャードの父ヘンリー2世は、当時、イングランド全土、ノルマンディー
(Normandy)公爵領、メーヌ(Maine)とアンジュー(Anjou)伯爵領、アキテー
ヌ(Aquitaine)公爵領(リムーザンLimousin、ガスコーニュGacony、ペリゴー
ルPerigord)を領有し、オーヴェルニュ(Auvergne)とトゥールーズ(Toulouse)
伯爵領の宗主権を保有する、アンジュー帝国(Angevin Empire)を建設していた。

この巨大化したアンジュー帝国の相続に関して、複雑な難題が生じた。

というのは、ヘンリー2世とアリエノール=ダキテーヌとの拗れた夫婦仲、
国境に接するルイ7世(Louis , 1120-1180.9.28 : 在位 1134-1180)や他のバロ
ンたちとの勢力争い、さらに兄弟同士との拗れた関係、があったからである。

複雑な難題の下に育った3男リチャードは、とにかく自己の生活を確保する
ために、自分人が強くなければならないと、考え出した。

そのためには、他の兄弟よりも、ヨリ多くの領土を確保しなければならない
し、また、自己の地位を確保、安定させるためには、イングランドの王位を継
承することであった。

そのことを着実に進めるためには、確保した領土、およびイングランドを、政治的に安定させ、経済的に豊かにしなければならない。

具体的には、軍事力の確保、増強である。

それには、当然、イングランドおよび支配地からの税収入が必要である。

そこで本稿では、3男リチャードが、1189年9月3日、ウェストミンスター＝アベイ(Westminster Abbey)で、戴冠式を挙げ、正式にイングランド王位を継承し、リチャード1世(Richard I, the Lion Hearted, Cœur de Lion: 在位1189.9.3-1194.6)に就くまでの間、どのような相続の経緯があったのか、またイングランドに対して、どのような経済的負担をかけたのかを、考察する。

II 相続

リチャード、後のイングランド王リチャード1世は、ヘンリー2世とアリエノール＝ダキテーヌとの子として、順番から言うと、第4子、3男として、オックスフォード、ボウモント＝パレスで、1157年9月8日、生まれた。

リチャードが生まれた、当時のイングランドは、父ヘンリー2世が、良きかつ厳格に政府をコントロールし、平和な時期を迎えていた。

具体的には、イングランドにおいて、父ヘンリー2世は、行政、司法、立法、軍事を改革することにより、強い政府を築いたのであった。

だが、イングランド以外のフランスでのアンジュー帝国の統治においては、かなりの困難さを呈していた。

というのは、ヘンリー2世が築いた広大なアンジュー帝国(Angevin Empire)が、1つの国家ではなく、独立した国家をまとめていたに過ぎなかったからである¹⁾。

また、その統治のため、巨額な軍事費、すなわちスキューテイジ(Scutage: 軍役免除税)、シールド＝ドマネー(Shield-Money: 楯税)を徴収していたものの、境界地でのいざこざが絶えなかったからである。

1) Georges Duby, *France in the Middle Ages: from Hugh Capet to Joan of Arc*, Reprinted of 1987, ed., Blackwell, 1991, p. 193.

このいざこざの最中に、ヘンリー2世は、フランスの慣習に従い、生前中に、子供たちへの相続を考えなければならなかった²⁾。

もし、ヘンリー2世が、充分なスキューティジを確保し、軍事力を強化し、境界地でのいざこざをなくし、子供たちへの遺産相続を考えていたならば、王位継承は、多少とも、スムーズに行っただであろう。

ヘンリー2世は、法的相続人男子5人を含む、8人の子供を儲けた³⁾。

だが、第1子である長男ウィリアム(William, 1153.8.17-c. 1155.2)は、生まれて、2年たたずに亡くなった⁴⁾。

長男ウィリアム以後の男子相続人は、2男ヘンリー(Henry, Le Jeune : the Young King, 1154.2.28-1183.6.11)、3男リチャード(Richard, 1157.9.8-1199.4.6)、4男ジェフリー(Geoffrey, 1158.9.23-1186.8.19)、5男ジョン(John, 1167.12.24-1216.10.18)である。

2) David Hume, *The History of England: from the Invasion of Julius Caesar to The revolution in 1688*, Vol. 1, Reprinted of 1778, ed., Liberty Classics, 1983, p. 348.

3) Josephine Ross, *Kings & Queens of Britain*, Reprinted of 1982, ed., London: Artus Books, 1994, p. 24.

・8人の子供たちは、次の通りである。すなわち、長男ウィリアム(William, 1153.8.17-c.1155.2)、2男ヘンリー(Henry, Le Jeune : the Young King, 1154.2.28-1183.6.11)、長女マティルダ(Matilda of England, 1156-1189.6.28)、3男リチャード(Richard, 1157.9.8-1199.4.6)、4男ジェフリー(Geoffrey, 1158.9.23-1186.8.19)、2女エレンア(Eleanor of England, 1162.10.13-1214.10.31)、3女ジョアン(Joan of England, 1165.10-1199.9.4)、5男ジョン(John, 1167.12.24-1216.10.18)である。

4) K. レイサ氏の研究によると、長男幼児の死亡時を、1156年としている(K. Leyser, "Frederic Barbarossa, Henry II and the hand of St. James", *The English Historical Review*, Vol. 90, 1975, p. 497.)。だが、G.B. アダムスの研究によると、「長男ウィリアムは、2男ヘンリーが生まれる2〜3週間前に、亡くなっている」(George Burton Adams, *The History of England: from the Norman Conquest to the Death of John* (1066-1216), in William Hunt and Reginald L. Poole, eds., *The Political History of England*, Vol. 2, Reprinted of 1905, ed., AMS Press, Kraus Reprint Co., 1969, p. 262.)としている。また、A. L. プール氏の研究によっても、「(1155年4月、ウォリングフォードで)2歳も経たない長男ウィリアムの葬儀で、バロンたちに忠誠を誓わせた」(Austin Lane Poole, *From Domesday Book to Magna Carta 1087-1216*, in George Clark, ed., *The Oxford History of England*, Vol. 3, Second Edition, Reprinted of 1955, ed., Oxford University Press, 1986, p. 212.)としている。そこで、著者(=川瀬)は、K. レイサ氏と、A. L. プール氏の研究に従い、長男ウィリアムの生年月日を、1153年8月17日から、1155年2月頃にした。

ヘンリー 2 世の子供たちへの遺産相続は、5 男ジョンが生まれる前に、すでに決まっていた⁵⁾。

子供たちへの遺産相続が計画され始めたころから、ヘンリー 2 世と、アリエノール=ダキテーヌとの夫婦仲は、壊れ始めていた。

というのは、夫婦間の考え方の違いと、ヘンリー 2 世の浮気である。

具体的には、フランス軍と叔父レイモン=ドゥ=ポワティエ (Raymond de Poitiers, c. 1114-1149.6.29) のアンティオキア (Antioch) 軍との合同作戦において、夫ヘンリー 2 世の作戦方法と異なったこと⁶⁾、また夫ヘンリー 2 世が若くて美しいロザモンド=クリフォード (Rosamond Clifford, c. 1140-c. 1176) と浮気し出したことである⁷⁾。

そこで、妻アリエノール=ダキテーヌは、若くて美しい愛人ロザモンド=クリフォードの出現により、夫ヘンリー 2 世との決別を考えるようになっていた⁸⁾。

妻アリエノール=ダキテーヌの気持ちか、決定的になったのは、1167 年 12 月 24 日、5 男ジョンを出産した直後である。

その証拠として、ヘンリー 2 世と別居のため、アリエノール=ダキテーヌが、翌年 1168 年に、アンジュー伯領の中心都市ポワティエ (Poitiers) に、3 男リチャードを連れ、戻ったことから判断できる⁹⁾。

また、不仲が生じ始めたアンジュー家に対し、アンジュー家の巨大化に危機感を感じ始めていたフランス王ルイ 7 世は、アンジュー家への弱体化を、しだいに考え始めた。

すなわち、政略結婚によるアンジュー家の分割であった。

5) Allen Andrews, *Kings & Queens of England & Scotland*, Reprinted of 1976, ed., Marshall Cavendish, 1994, p. 47.

6) J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 121.

7) ・ヘンリー 2 世の愛人ロザモンド=クリフォードが、若くて美しいというのは、その後の彼女の思い出が、ロサ=ムンディ (Rosa Mundi) という美しいバラの名前に付けられたり、フェア=ロザモンド (Fair Rosamond: 美しきロザモンド) という絵画に描かれたりしている、ことから推察できる。

・Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 332, n. 5.

8) Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 257.

9) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 333.

2010年12月 川瀬 進：リチャード1世の野心的王位継承

具体的には、ヘンリー2世の3男リチャードに対し、ルイ7世自身の2番目の妃コンスタンス＝ドゥ＝カスティーユ (Constance de Castille, c.1136-1160.10.4)の2女アデル＝ドゥ＝フランス (Adèle de France, 1160-c.1120: Alys)と結婚させることであった。

なお、この計画は、ルイ7世と彼の側近たちの中で、1165年8月21日に、話し合われた¹⁰⁾。

Ⅲ バロニアル＝レヴォルト (Baronial Revolt : バロンの反乱)

ヘンリー2世は、イングランドにおいては、国王である。

だが、フランスにおいては、ヘンリー2世は、フランス国王ルイ7世 (Louis, 1137-80)の封建的家臣である。

あらゆる時代のすべての国王にとって、その責務は、自国の経済を安定させ、自国を維持、拡大させ、かつ自国を、血縁関係の優位者に、相続させることであった。

このことは、当然、ヘンリー2世にも、理解していたことであった。

巨大なアンジュー帝国を統治するヘンリー2世にとって、相続は、長男ウィリアムの死や、また妻アリエノール＝ダキテーヌとの不仲によって、ますます気掛かりな問題となっていた。

イングランド王であるヘンリー2世にとって、イングランドでの相続は、法的相続人の上位から行われるので、さほど困難は、なかった。

だが、フランスでの相続は、そう簡単ではなかった。

というのは、ヘンリー2世が、ルイ7世の封建的家臣であるが故に、フランスでの領地を保有する時、ルイ7世に対し、敬意を表すために、オマーージュ (homage : 臣従礼)を執らなければならなかったからである。

また、子供たちが、フランスの領地を相続するにしても、ルイ7世に対し、オマーージュを執らなければならなかったからである。

10) J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, Reprinted of 1915, ed., AMS Press, Inc., 1971, p. 127.

さらにまた、妻アリエノール＝ダキテーヌの前夫が、ルイ7世であったからである。

結果的に、フランスの封建的家臣であるヘンリー2世は、フランスでの領地保有に関しては、自分の意思次第で、即断即決できなかったのである。

このような状況下において、ますます、フランス王国内でのルイ7世の所有地や、他のパロンたちの領有地での境界地で、小競り合いが増加していった。

そこで、ヘンリー2世は、フランスでの相続を、スムーズに行うために、まず、フランス王ルイ7世との友好関係を結ばなければならなかった。

そのことを実現させるために、すなわちルイ7世との平和条約を結ぶために、ヘンリー2世は、1169年1月6日、フランス、メヌ、モンミラーユ(Montmirail)にやって来た。

そして、同日の1169年1月6日に、モンミラーユ会議が、開催された¹¹⁾。

そこで、封建的家臣であるヘンリー2世は、モンミラーユ会議で、まず初めに、国王であるルイ7世に対し、オマージュ(臣従礼)を執った。

そして、その傍で、2人の息子、すなわち2男ヘンリー(Henry, 1155.2.28-1183.6.11)、3男リチャードも、ルイ7世に対して、フランスでの保有地を、相続することを表すために、オマージュを執った¹²⁾。

この1169年1月6日、モンミラーユ条約(the Treaty of Montmirail)により、2男ヘンリーは、ノルマンディー、メヌ、アンジューを相続し、また3男リチャードは、ルイ7世の2番目の妃コンスタンス＝ドゥ＝カスティユ(Constance de Castille, c.1136-1160.10.4)の2女アデル＝ドゥ＝フランス(Adèle de France, 1160-c.1120: Alys)と婚約し、アキテーヌを相続することになった¹³⁾。

その後の相続として、4男ジェフリー(Geoffrey, 1158-1186)は、婿養子によるブルターニュの相続、5男ジョン(John, 1167.12.24-1216.10.18)は、領土

11) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 329.

・Christopher Harper-Bill, *Saint Thomas Becket*, Reprinted of 1990, ed., Cathedral Enterprises Ltd., 2001, p. 21.

12) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 329.

13) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *Ibid.*, p. 329.

無しであった¹⁴⁾。

ヘンリー2世が、巨大化したアンジュー帝国の継続的な安泰のため、また妻アリエノール＝ダキテーヌとの不仲によって、アンジュー帝国の崩壊危機を避けるため、できるだけ早く、アンジュー帝国を分割し、かつその分割地を、子供たちに統治させるという、政策を執ったのは、当然の結果であった。

この5男ジョンにとっての領土無しというのは、1169年1月6日のモンミラーユ条約以前、すなわち5男ジョンが生まれる前に、すでにイングランドと、アンジュー帝国の相続が決定していたからである。

5男ジョンが生まれたのは、1167年12月24日であり、母アリエノール＝ダキテーヌが、45歳の時出産した。言い換えると、5男ジョンは、予期せぬときに生まれた子供であり、両親は、彼の相続については、まったく意識になったのである¹⁵⁾。

だが、このジョンへの領土無しという結果は、フランス王よりも広大な領土を、保有したり、所有したりしているアンジュー帝国の支配者ヘンリー2世にとって、不可思議な決定であった。

でも、ヘンリー2世は、その後、1177年5月、ローマ教皇アレクサンデル (Alexander , 1159-81) の許しを得て、5男ジョンへの領地として、アイルランドを与えている¹⁶⁾。

すなわち、5男ジョンへのドミヌス＝ヒベルニ (Dominus Hibemiae : Lord Ireland : アイルランド太守) である¹⁷⁾。

ルイ7世にとって、このモンミラーユ条約は、都合の良いことであった。

というのは、広大なアンジュー帝国を、子供たちに分割、統治させるということは、ヘンリー2世の軍事力低下へと、繋がるからであった。

14) Kenneth O. Morgan, Edited by, *The Oxford History of Britain*, John Gillingham, "The Early Middle Ages (1066-1290)", Reprinted of 1984, ed., Oxford University Press, 1993, p. 145.

15) Allen Andrews, *Kings & Queens of England & Scotland*, *op. cit.*, p. 47.

16) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 329.

17) Allen Andrews, *Kings & Queens of England & Scotland*, *op. cit.*, p. 46.

だが、このモンミラーユ条約の子供たちへの土地譲渡は、形式的なものであり、その譲渡された領地の実権は、依然として、ヘンリー2世が、持ち続けていた¹⁸⁾。

実権のない、形式的な称号付与における譲渡において、2男ヘンリー、3男リチャード、4男ジェフリーは、不満が募るばかりであった。

また、このモンミラーユ会議において、ルイ7世は、教会改革、すなわち教会の裁判権問題で、教会側に立ち、身の危険を感じ、イングランドからフランスに亡命していた¹⁹⁾、カンタベリー大司教トマス=ベケット(Thomas Becket, c. 1118-1170.12.29, 在位 1162-1170.12.29)と、ヘンリー2世とを、仲直りさせようと会わせた。

このトマス=ベケットの亡命理由は、教会裁判所の権限弱体化を狙った16カ条のクラレンドン法(Constitutions of Clarendon)を、推し進めようとしたヘンリー2世に対する反発であり、抵抗であった。

この1169年1月6日のモンミラーユ会議におけるヘンリー2世とトマス=ベケットとの和解は、不調に終わった。

イングランドを、より安泰にするために、ヘンリー2世は、1170年に、イングランドの統治を、自身の実質の後継者である2男ヘンリーと、共同で行うことを決めた。

すなわち、ヘンリー2世は、1170年6月14日、アンジュー伯、ノルマンディー公である2男ヘンリーを、ウェストミンスター=アベイにおいて、意図的に、ヨーク大司教ロジャー(Archibishop Roger of York)のもと、戴冠式を挙げ、イングランド王、ヤング=ヘンリー(Henry, Le Jeune: Young King)とならせた²⁰⁾。

この意図的というのは、国王の戴冠式は、ヨーク大司教よりも、上位にあるカンタベリー大司教が取り行うのが、唯一の権利であったのを、無視したからである。

18) · Kenneth O. Morgan, Edited by, *The Oxford History of Britain*, *op. cit.*, p. 145.
· Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 332.

19) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 290.

20) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 293.

すなわち、国王の戴冠式は、ノルマン＝コンクエスト（Norman Conquest：ノルマン征服）以来、カンタベリー大司教が行うことが、カンタベリー教会の伝統的権利であった²¹⁾からである。

伝統的権利を無視したヘンリー2世の行動は、とうてい、トマス＝ベケットとの和解を、得られるものではなかった。

また、このヘンリー2世の行動は、教会、ローマ教皇との溝を深める結果となるので、国内経済にも、多少の影響を及ぼすことになった。

再度、ルイ7世は、ヘンリー2世と、トマス＝ベケットとを仲直りさせるために、1170年7月22日、パリから直線で南西約160キロメートル、モンミラーユから直線で南東約40キロメートルのフレトヴァル（Fréteval）で、会議を設けることになった。²²⁾

このフレトヴァルの会議は、ルイ7世が、ヘンリー2世に、多少の譲歩を強いらす形で、成功に終わった。

なおその後、イングランドに戻った、カンタベリー大司教トマス＝ベケットは、1170年12月29日夕方、カンタベリー大聖堂の中で、ヘンリー2世の家臣4人によって、殺害された²³⁾。

このことは、2男ヤング＝ヘンリーを激怒させた。

というのは、1163年10月1日、教会改革、すなわち教会裁判所の権限弱体化を目指した、ウェストミンスター会議が開催されるまで、カンタベリー大司教トマス＝ベケットが、2男ヤング＝ヘンリーの保護責任者、後見人であった、からである²⁴⁾。

また、2男ヤング＝ヘンリーは、父ヘンリー2世と、イングランドを共同統

21) Christopher Harper-Bill, *Saint Thomas Becket*, *op. cit.*, 2001, p. 28.

22) · Cf. David Hume, *The History of England*; from the Invasion of Julius Caesar to The Revolution in 1688, Vol. 1, Reprinted of 1778, ed., *LibertyClassics*, 1983, p. 328.
· Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 293.
· Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 213.
· Christopher Harper-Bill, *Saint Thomas Becket*, *op. cit.*, 2001, p. 28.

23) Christopher Harper-Bill, *Saint Thomas Becket*, 2001, *op. cit.*, p. 33.

24) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, pp. 303-304.

治しているのであるが、そこでの政治的実権がないことに対して、父ヘンリー2世に対し、不満を募らせていた²⁵⁾。

なお、3男リチャードは、1172年に、ポワティエ (Poitiers) のセント=ヒラリー教会 (St. Hilary) で、厳粛にアキテーヌ公 (duchy of Aquitaine)、ポワトゥー伯 (county of Poitou) に就いた²⁶⁾。

だが、3男リチャードが、アキテーヌ公に就いたものの、依然として、その実権は、父ヘンリー2世が握っていたので、3男リチャードは、不満が募っていた。

この3男リチャードのアキテーヌ公領の支配において、2男ヤング=ヘンリーは、さらに、父ヘンリー2世に対して、不満を募らせた。

また、4男ジェフリーも、相続に関して、父ヘンリー2世に対して、不満を持っていた。

この2男ヤング=ヘンリーの不満を、さらに助長させたのが、母アリエノール=ダキテーヌと、1172年に、2男ヤング=ヘンリーと結婚したマルグリッド=ドゥ=フランス (Marguerite de France, 1158-1197) の父ルイ7世とであった²⁷⁾。

また、立法権を奪われたバロン (Baron: 国王から直接に封 fief を受け取っている家臣、貴族) たちや、カンタベリー大司教トマス=ベケット殺害に激怒したローマ教皇アレクサンデル3世 (Alexander , 1159-1181) も、ヘンリー2世に対して、不満を持っていた。

1173年、第2回目の戴冠式を終えた2男ヤング=ヘンリーは、その2~3週間後、表面上、妻の家族に会うということで、ノルマンディーに渡った。

その時、2男ヤング=ヘンリーは、義理の父ルイ7世から、「イングランド

25) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 293.

26) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 329.

・George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 303.

27) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 304.

・Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 333.

・なお、マルグリッド=ドゥ=フランスは、ルイ7世と、2番目の妃コンスタンス=ドゥ=カスティールとの長女である。

の実質的統治」を行うよう助言された²⁸⁾。

またこの時点で、イングランド、ノルマンディーのバロンたちにも、2男ヤング=ヘンリーによる「イングランドの実質的統治」を、支援した。

それらのことに勇気づけられた2男ヤング=ヘンリーは、1173年春、イングランドに戻り、すぐに父ヘンリー2世に、実権のあるイングランド統治を要求した。

だが、ヘンリー2世は、その要求を、即座に拒否した²⁹⁾。

この拒否により、2男ヤング=ヘンリーの不満は、父ヘンリー2世への反逆へと変わっていった。

その反逆という心理状態をさらに悪化させたのは、父ヘンリー2世が、末っ子の5男ジョンとブルゴーニュ王国、モーリエヌ伯ウンベール3世 (Humberut, count of Maurienne) の娘アリス (Alice) の結婚のため³⁰⁾、2男ヤング=ヘンリー所領のうち、3つの重要な城 (要塞)、すなわちシノン (Chinon)、ルーダン (Loudun)、ミラボウ (Mirabeau) を、明け渡すように要求してきたことである³¹⁾。

この要求において、ヤング=ヘンリーの反逆は、武力を伴う反逆へと、進んでいった。

すなわち、ヤング=ヘンリーは、イングランドや、ノルマンディーのバロンたちに対し、武力で持って、ヘンリー2世に対抗するよう促したのである。

このことが、1173年の4月初旬、パロニアル=レヴォルト (the baronial Revolt : バロンの反乱) を、蜂起させた。

このパロニアル=レヴォルトは、ノルマンディーとイングランドにおいて、行われた。

28) ・George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 305.

・Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 333.

29) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 305.

30) ・Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 330, and n. 2.

・George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 305.

31) ・George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 307.

・Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 332.

ノルマンディーにおいては、次の3つの反乱があった。

1173年7月初旬、ヤング=ヘンリーが、フランドル伯爵、ブローニュ伯爵と共に、ノルマンディーの東部から、ルイ7世が南部から、ブラバント傭兵隊が西部から、侵攻した³²⁾。

この1173年のバロニアル=レヴォルトに同調して、3男リチャードと4男ジェフリーも、アキテーヌにおいて、父ヘンリー2世に反逆した。

この時点では、3男リチャードは、第4男ジェフリーに対し、好意的であった。

イングランドにおいては、2つの重要な反乱があった。

1つ目の反乱は、レスター伯ロベルト (Robert, earl of Leicester) が、1173年10月、傭兵隊と共に、イングランドの東岸ノーフォーク (Norfolk) に侵攻してきたことである³³⁾。

その2つ目の反乱は、1173年のバロンの反乱という情報を得たスコットランド王ウィリアム1世 (William I, the Lion, 1165-1214) が、ヤング=ヘンリー側につき、反乱を行ったことである³⁴⁾。

具体的には、ヤング=ヘンリーにとって、重要人物であったスコットランド王ウィリアム1世が、1174年3月31日、イースター直後、イングランド北部ノーサンバーランド (Northumberland) に、侵攻したことである³⁵⁾。

この相続を巡る争いから、1部のイングランド国民は、経済的に、困窮を強いられることになった。

イングランド外部からの侵攻、またイングランド内での反乱により、バロンに付き添っているナイト (knight: 騎士) および家臣たちが、実際に戦わなければならない。

32) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 308.

33) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 335.

・George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 309.

34) Charles Oman, *A History of The Art of War in the Middle Ages*, Vol. 1: 378-1278AD, Reprinted of 1924, ed., Greenhill Books, 1991, p. 400.

・Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 335.

35) Andrew Lang, *A History of Scotland: from the Roman Occupation*, Vol. 1, Reprinted of 1903, ed., AMS PRESS, 1970, p. 111.

その際、農民たちは、特別に農産物供出させられたり、戦費を徴収させられたりするからである。

なお、この侵攻の間、ヘンリー2世は、胸につかえているカンタベリー大司教トマス＝ベケットの殺害に悔いるために、イングランドにやって来た。

というのは、1174年7月12日、ヘンリー2世は、カンタベリー大聖堂にて、懺悔を行い³⁶⁾、ローマ教皇アレクサンデル3世に赦しを乞うためであった、からである。

スコットランド王ウィリアム1世によるイングランド北部への侵攻は、最初は順調に行ったが、彼の熟慮に欠いた侵攻作戦のため、1174年7月13日、ノーサンバーランドのアニク（Alnwick）で、濃霧に隠れていたヘンリー2世軍に遭遇し捕らえられた³⁷⁾。

このスコットランド王ウィリアム1世の拘束は、2人のシェリフ（sheriff：州長官）、すなわちヨークシャー、スチュエビルスのロバート（Robert of Stuteville）と、ランカスター、ラヌルフ＝グランヴィル（Ranulf Glanvill）とであった³⁸⁾。

拘束されたスコットランド王ウィリアム1世は、1174年7月31日、ノーサンプトン（Northampton）で、ヘンリー2世に引き渡された³⁹⁾。

その後、スコットランド王ウィリアム1世は、ノーサンプトンから、フランス、ノルマンディーのファレーズ（Falaise）に連れてこられて、両者の関係が修復するまで、幽閉された。

スコットランド王ウィリアム1世の捕虜、およびレスター伯ロベルトの侵攻

36) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 310.

37) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *Ibid.*, pp. 311-312.

・Andrew Lang, *A History of Scotland: from the Roman Occupation*, Vol. 1, *op. cit.*, 1970, p. 112.

・Charles Oman, *A History of The Art of War in the Middle Ages*, Vol. 1: 378-1278AD, *op. cit.*, p. 400. このオーマン氏の研究によると、濃霧のあった月を6月としているが、上記2つの史料（アダムス氏とラング氏の研究）から、7月とした。

38) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 311.

39) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 277.

失敗により、2男ヤング＝ヘンリーは、父ヘンリー2世と和解しなければならなくなった。

すなわち、1174年9月30日、両当事者間において、休戦会談がおこなわれた⁴⁰⁾。

この休戦会談において、ヘンリー2世は、子供たちに、相当額の賠償金を要求することで、調停に同意し、協定を子供たちと結んだ⁴¹⁾。

この会談において、アキテーヌで反乱を起こしていた3男リチャードと4男ジェフリーは、父ヘンリー2世に対して、「臣従礼」を執った。

だが、2男ヤング＝ヘンリーは、すでにイングランド王位を継承していたので、この父に対する「臣従礼」を執らなかった⁴²⁾。

また、この休戦会談において、ヘンリー2世は、スコットランド王ウィリアム1世に対し、ファレーズ協定 (treaty of Falaise) を、結ばせた⁴³⁾。

このファレーズの協定とは、「スコットランドが完全にイングランドに臣従すること」ということであった⁴⁴⁾。

これにより、アキテーヌで反乱に荷担した妻アリエノール＝ダキテーヌは、重罪犯として、イングランドに連れ戻され、夫ヘンリー2世が亡くなる1189年7月6日以降まで、幽閉された⁴⁵⁾。

父ヘンリー2世と相続問題において、反抗していた2男ヤング＝ヘンリーに、援助を与えていたルイ7世が、病気のため、1180年9月28日に亡くなった。

このことにより、1連の封建的争い、すなわちヘンリー2世とルイ7世との抗争いが、息子のフィリップ2世 (Philippe Auguste, 1165.8.21-1223.7.14: 在位 1180-1223) に引き継がれることとなった⁴⁶⁾。

40) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 313.

41) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *Ibid*, p. 313.

42) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *Ibid*, p. 314.

43) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *Ibid*, p. 314.

44) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 277.

45) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *Ibid*, p. 338.

46) J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 134.

フィリップ2世、すなわちフィリップ=オギュストは、5男ジョンより、2歳年上であるが、フランス王国の安全と拡大のため、積極的に、アンジュー帝国内のゴタゴタに、介入していった。

フィリップ=オギュストが王位に就いた時、アンジュー帝国内の紛争は、下記の通りである。

3男リチャード+父ヘンリー2世 vs. 2男ヤング=ヘンリー+4男ジェフリー+フィリップ=オギュスト

アンジュー帝国を支配するヘンリー2世であったが、妻、および子供たちとの不和は、なかなか収まらなかった。

この不和の間、子供たちは、3男リチャードを含め、そう大した争い事はなかった。

だが、1182年になると、2男ヤング=ヘンリーが、自分自身の収入を、ヨリ多く獲得するために、3男リチャードのアキテーヌ支配権に、不満を言いだした。

この不満を和らげるために、父ヘンリー2世は、1182年のクリスマスの時に、フランス、カン(Caen)に、家族を集め、アキテーヌ公3男リチャードに対し、2男ヤング=ヘンリーに、忠誠を誓うよう、命じた⁴⁷⁾。

だが、アキテーヌ公リチャードは、アキテーヌのため、兄2男ヤング=ヘンリーへの忠誠を、きっぱりと断った⁴⁸⁾。

この拒否は、3男アキテーヌ公リチャードの強い利己的野心の表れである。このことにより、ヘンリー2世の家族は、ばらばらになり、相続問題で、紛争が始まることになった。

IV 王位継承

ヘンリー2世のアンジュー帝国への安泰は、1183年に消え去ってしまった。というのは、2男であり、イングランドの共同統治者であるヤング=ヘン

47) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 335.

48) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *Ibid*, p. 335.

リーが、1183年6月11日に、赤痢（dysentery）亡くなったからである⁴⁹⁾。

この2男ヤング=ヘンリーの死において、ヘンリー2世は、早急にフランスの慣習に従い、事実上、法的王位継承の優先的順序のトップになった3男リチャードに、イングランドの王位、およびノルマンディー、メーヌ、アンジューを相続させることにした。

その代わりに、ヘンリー2世は、いままで3男リチャードが保有していた所領、アキテーヌを、5男ジョンに、譲渡するように、申し出た。

このヘンリー2世の申し出は、当然のことにように思われる。

いままで、広大なアンジュー帝国なかで、少しも相続が認められていなかった5男ジョンに、アキテーヌ公領を相続させるということは、当然の親心であったからである。

だが、3男リチャードは、この申し出に激怒し、アキテーヌに戻り、きっぱりと、この申し出を、断った⁵⁰⁾。

3男リチャードが、この申し出を断った理由は、3つあるように思われる。

1つ目は、生まれてすぐに、母の故郷アキテーヌに連れてこられ、母の愛情で持って、この地で育ち、この地アキテーヌ公爵を継承し、このアキテーヌの地を、母のためにも、手放したくないと、考えたからである。

2つ目は、既存の領地以上に、領地が拡大することは良いことであるが、弟への譲渡といえども、既存の領地を失ってまでも、領地が拡大することは許せない、とする野心的な考えがあったからである。

3つ目は、自身の領地を少しでもの拡大させることによって、いずれ、父ヘンリー2世に取って代わり、アンジュー帝国の支配者になりたいという、野心があったからである。

このような申し出拒否は、当然、経済的背景がある。

3男リチャードは、アキテーヌ公爵といえども、その実権は、父ヘンリー2世にあり、父に実権のあるイングランド、ノルマンディー、メーヌ、アンジュー

49) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 341.

50) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 338.

を支配したとしても、その税収入のほとんどが、父ヘンリー2世に入っていたからである。

3男リチャードとしては、とにかく、自由になる独立した保有地、自由になる税収入が欲しい。

各支配地から入るスキューテイジ(Scutage:軍役免除税)、シール=ドマネー(Shield-Money:楯税)を、すべて自身の財政収入にし、戦費として、外国人傭兵を雇い、自身の保有地を、安全にしなければならない。

自身の保有地の安全のためには、ヨリ多くのスキューテイジ、シール=ドマネーを、確保しなければならない。

言い換えると、十分な戦費を確保する上で、3男リチャードは、自身の保有地から、父ヘンリー2世の影響を、排除しなければならなかった。

このような経済的背景から、当然、3男リチャードは、父ヘンリー2世の申し出を、断らなければならなかったのである。

3男リチャードが、父ヘンリー2世の申し出を拒否したということは、当然、紛争が始まるということ、意味していた。

ヘンリー2世は、1184年に、5男ジョンに対し、3男リチャードと戦うことを許した⁵¹⁾。

この紛争では、5男ジョンを援護するために、4男ジェフリーが、加わった。ヤング=ヘンリーが、赤痢で亡くなった直後、アキテーヌの相続を巡って、下記の紛争構図が出来上がった。

3男リチャード vs. 4男ジェフリー + 5男ジョン + 父ヘンリー2世

その後、しばらくして、4男ジェフリーに不幸が訪れた。

すなわち、4男ジェフリーが、フランス王フィリップ=オギュストに招待され、フランス国内で夏を過ごしていた時、1186年8月19日、パリにおいて、馬上槍試合で亡くなった⁵²⁾のである。

4男ジェフリーの死によって、男子相続によるアンジュー帝国の危機を感じ

51) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *Ibid*, p. 339.

52) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 342.

・J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 135.

たヘンリー2世は、フランス王フィリップ=オギュストと和平を、築きたかった。

そこで、ヘンリー2世は、1187年2月中旬、ノルマンディーに渡り、フィリップ=オギュストと、私的な会談を設けた⁵³⁾。

だが、その会談の結果は、何も得るものがなく、2人の状況は、戦争へと向かっていた。

この紛争は、1187年5月中旬以降に、始まった。

フィリップ=オギュスト側の方が優勢で、アンジュー帝国の存亡にとって重要なシャトール城 (castle of Chateauroux) を、包囲攻撃した⁵⁴⁾。

だが、この軍事的に重要なシャトール城は、3男リチャードの活躍によって守られた⁵⁵⁾。

また、この軍事上重要なシャトール城の攻防において、下記の紛争構図が出来上がった。

3男リチャード vs. フィリップ=オギュスト

その後、ヘンリー2世が、この紛争を避けたいという気持ちで、フィリップ=オギュストとの和平交渉が行われ、締結された⁵⁶⁾。

この締結を、1187年6月、シャトール和平 (Peace of Chateauroux) という⁵⁷⁾。

だが、3男リチャードは、依然として、父ヘンリー2世と紛争を、続けていた。

その紛争の最中、西洋のキリスト教国全体に、激震が生じた。

それは、サラディン (Saladin) の軍事力が増加し、1187年7月、ハッティンの戦い (the battle of Hattin) で、十字軍が、イスラム軍に大敗を喫したことや、1187年10月3日に、聖地エルサレム (Jerusalem) が、陥落したということであった⁵⁸⁾。

53) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 347.

54) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *Ibid*, p. 347.

55) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *Ibid*, p. 347.

56) Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *Ibid*, pp. 347-348.

57) J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 135.

58) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 343.

・George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 349.

・J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 136.

キリスト教国にとっては、大問題であった。

この大問題に対処するために、教皇ウルバヌス3世(Pope Urbanus , 1185-1187)は、タイヤ(Tyre)の大司教ウィリアム(William)に命じて、1188年1月21日、ジゾール(Gisors)近辺で、ヘンリー2世とフィリップ=オギュストとの和平会談を、実現させた⁵⁹⁾。

その会談で、十字軍参戦のためには、多額の戦費が必要である、ということが確認され、そして、その結果、フィリップ=オギュストは、フランスで、またヘンリー2世は、1188年2月10日、イングランドの全教会で、戦費となるタイス(tithe: 10分に1税)を、徴収することとなった⁶⁰⁾。

このタイスを、サラディン=タイス(the Saladin tithe: サラディンの10分の1税)という。

イングランド国民は、このサラディン=タイスにより、一層の経済的負担を、強いられることになった。

サラディンに対抗するために、ヘンリー2世とフィリップ=オギュストとは、和解し、一致団結することになった。

だが、この十字軍参戦も、一致団結も、つかのまでであった。

というのは、アキテーヌにおいて、十字軍参戦を切望していたリーダ、ポワトゥー伯であり、アキテーヌ公でもある3男リチャードに対し、反乱が起こったからである⁶¹⁾。

この反乱を、速やかに、収めた3男リチャードは、その反逆者たちを、十字軍に参加するという条件で、自由にした。

このことが、父ヘンリー2世の反発を招いたり、またトゥールーズ伯レイモン6世(Raymond , Count of Toulouse)の長年の敵愾心を、引き出したりしてしまった。

59)・David Hume, *The History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, pp. 365-366.

・George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 350.

60) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 351.

61)・George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *Ibid*, p. 351.

・Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 344.

トゥールーズ伯レイモン6世は、アキテーヌの反乱に乗じて、3男リチャードに対する長年の不満を少しでも和らげるために、イングランドからの商人を、数名拘束した。

これに対し、3男リチャードは、早急に、トゥールーズ内で、トゥールーズ伯の主要な大臣を、捕らえた。

さらにこれに対し、トゥールーズ伯レイモン6世は、サンチアゴ＝デ＝コンポステラ（Santiago de Compostela）への巡礼からの戻り道、トゥールーズに立ち寄っていた2人のナイト（knight：騎士）を、捕らえた⁶²⁾。

この状況を、3男リチャードは、フィリップ＝オギュストに訴えたが、何の変化もなかった。

そこで、3男リチャードは、自らトゥールーズに乗り込み、トゥールーズ内の城を、次から次へと、占領していった。

この状況を見極めたフィリップ＝オギュストは、トゥールーズ伯レイモン6世側に立ち、積極的に、この紛争に介入していった。

具体的に、フィリップ＝オギュストは、大軍を率いて、オーヴェルニュ（Auvergne）に侵攻し、シャートル城を占領し、ベリー（Berri）全体を、支配下においた⁶³⁾。

何度か、この紛争を終わらせるために、ヘンリー2世とフィリップ＝オギュストとの、お互いの大使が派遣されたが、効果はなかった。

ついに、1188年8月30日、マント（Mantes）で、激戦が繰り広げられた。

この紛争を終えるためには、早急の和平会談が必要であった。

和平会談が、開催されても、ヘンリー2世とフィリップ＝オギュストとの思惑が、障害となり、実のある結果が出なかった。

その後、フィリップ＝オギュストの策謀を実現させるための、劇的で最終的な和平会談が、1188年11月18日に、ボンムーラン（Bonmoulins）で、開催された⁶⁴⁾。

62) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 352.

63) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *Ibid*, p. 352.

64) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *Ibid*, p. 354.

その劇的で最終的なこととは、3男リチャードが、フィリップ=オギュスト側につき、フランス王フィリップ=オギュストに対し、「臣従礼」を執った⁶⁵⁾、ということである。

この「臣従礼」には、3男リチャードの3つに野心があった。

1つ目は、3男リチャードが、父ヘンリー2世に対し反逆し、フランス王フィリップ=オギュスト側に付いたのは、当然、父ヘンリー2世に対する一連の不満と、野心があったからである。

2つ目は、3男リチャードが、イングランド王に就いたものの、その実権は、依然として父ヘンリー2世にあり、自由になる貨幣が得られなく、父を超えるため、ヨリ多くの貨幣を、欲したいという野心があったからである。

3つ目は、3男リチャードが、アキテーヌを、5男ジョンに譲渡せよ、との父ヘンリー2世の申し出に対し、父ヘンリー2世に対し、かなりの不信感を持ち、その不信感を払拭させるためにも、アキテーヌを、死守したいという、野望があったからである。

3男リチャードの反逆に対し、父ヘンリー2世は、精神的なショックを受け、重病に罹り、1189年7月6日、亡くなった⁶⁶⁾。

もし、3男リチャードが、利己的野心がなかったならば、フランス王フィリップ=オギュスト側に付くことなく、また父ヘンリー2世を、重病に至らせなかったであろう。

V おわりに

3男リチャードは、イングランドで生まれてまもなくして、アキテーヌに連れて行かれ、そこで育った。そのアキテーヌは、母アリエノール=ダキテーヌの故郷であり、3男リチャードは、子供時代、大事に育てられた。

その子供時代は、イングランドに対し、関心も興味も無くても良かった。

65) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 355.

・J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 136.

66) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 357.

また、その子供時代に、イングランド、およびアンジュー帝国での多くの紛争を、見たり、経験したりした。

その経験が、3男リチャードの利己的野心を、培っていった。

イングランドに対する無関心も、一旦、相続問題が生じると、そうはいかなかった。

3男リチャードにとって、相続の第1はアキテーヌ、第2はイングランドの王冠であった。

言い換えると、3男リチャードにとって、イングランドの王冠よりも、親しみ馴染んだアキテーヌの方が、精神的に価値があったのである。

このアキテーヌを死守するために、利己的な野心で持って、兄弟、および父ハンリー2世と、積極的に紛争をしなければならなかった。

そのためには、イングランドの経済を、いちいち考える暇はなく、イングランドは、戦費調達領土としか、考えていなかったようである。

また、3男リチャードは、利己的な野心を持っていたが故に、父ハンリー2世に反逆し、自己の立場を、明確に表すことができたのである。

その結果、3男ポワトゥー伯、アキテーヌ公リチャードは、イングランド王リチャード1世に就いたのである。